

私学の苦悩

わが建学の特殊性

この度の新入学生の中から「この学校の基督教主義はどう知れば判るのか」との質問が出たそうである。わが学園は学校の使命をはたすと同時に基督教主義の理想を達成すべく二重の重荷を負うている。まず「私学とは何ぞや」といった素人臭い借問を試みよう、書架に並んでいる「教育行政」から「新教育課程と学校経営」「大学経営の理論と実務」「学校運用辞典」、さては随想の「大学の顔役」まで手あたり次第眺めながら、この命題を検討して見たのである。

そこで、いまさら原始的な論議をこね廻す訳ではないが、「学校とは何か」と調べて見ると「すなわち学校とは、校舎等の物的設備と、学校の職員等の人的要素から成っているが、その各個の人的または物的構成部分から区別せられる法上の特殊性を取得し、その全

秦 孝 治 郎

体が一体として考えられるようになったものである。行政法上この一体的設備を營造物とよんでいるから、学校は營造物の一種である」と定義づけている。物と人がこん然一体となって教育という働きをするもの、それが学校である。

同志社の場合は、この普遍性に対し、さらに立学の特殊性を忘れることが出来ない。試みに、学校法人同志社の寄付行為第二条の目的を引用すれば、左の如くなっている。

「本法人は、教育基本法及び学校教育法に従い、キリスト教を徳育の基本とする学校を経営し、もって教育の実を擧げることが目的とする」

私学三法を現実に遂行しながら、精神教育を實踐しようとする極めて困難な高い次元を目指している。世間ではいまさらのように、道徳教育を粗上にのせて、遅蒔きながら、その第一歩を踏み出した

ようであるが、わが学園は、創立者新島先生という鏡があるため、手取り早く教育の姿を反射して、その時代に適した研鑽と練磨をすることが出来る。独り新入学生のみならず教職員等しく「新島研究」に執心すべきである。

ただ、その結実は容易ならぬ彼岸であつて、現状を内省自戒するときに、その理想に及ばざること遠きを浩歎するのみである。ひたすら過去のよき伝統と遺産をうけついで、それを新しい次元において伸展させ、充実させる革袋を創造するの外はない。

わが同志社の建学精神が目指すところは、自由、平等、自治であり、換言せば、民主主義である。大宅壮一氏は『大学の顔役』日本民主大学の一項に、左の皮肉な一齣に言及している。

「ただし、この民大にもいいところが一つある。それは自由だということだ。恐らく世界中どこをさがしても、こんな自由な大学はあるまい。その点で、この学校は『百家争鳴大学』と改称した方がよさそうだ。」

強ち、わが同志社大学を眼の敵にしているのではなく、実は東部の公私立大学を批判しているのである。しかし、いかにも痛いお灸である。

進学々徒の将来

出生率や人口の増減が、やがて学校経営に影響するのは、当然の常識であつたが、ここ数年來、眼の色をかえて論議し、検討し、杞憂するなどは近ごろ稀れな現象である。

日本の人口は、年間百八十万入位の自然増で、食料の前途を憂え

たものであつたが、昭和三十七年度は八十万入増加となり、実に百万人の激減となつたそうである。この悪影響は高校が昭和四十一年度から、大学には四十五年より表面化する。この深刻な様相は横ばいといへ向う二十年間は続くものと見なければならぬ。

日本私立中学高等学校連合会では、昭和三十八年度の高校生急増対策を講じ、全国私立高校が金百五十億円の負債をして新増設して前進したものが、こん度は、去る三月六日、東京で「第一回漸減対策委員会」を開いて、収容施設の過剰をどうするかの真剣な検討に移つている。猫の眼のように長期計画が変遷するのともうかと思ふ。

見通しの焦点は左の如く計算している。

昭和四十五年度に公私立合せて百三万人の収容施設に対して生徒数は四七万人しかないことになる。急増対策時の一学級当りの収容定員は一割増となつているので、これを正常定員（五七人）と修正すれば百三万人の収容施設は九十三万人分のものである（私中高調）、そこで五十四万人分の施設の過剰を生ずることになる。しかも高校入学志願者のうち学費の低い公立高校へ吸収されるものが大部分ということにでもなれば、施設の過剰はほとんど私立高校にしわよせされる危険性が強い」（教育學術新聞 三九・三・一一日号）と今から悲鳴をあげている。

昨年から今年にかけて終戦ツ子というベビーブームが高校に殺到する廻合せになつている。「昭和三十年に比べ入学定員は、全日制高校で約七十二万人から百五十八万人（昭和三十八年）と二倍以上にふえているのに、倍率は一・四倍から一・七倍へとかかつて高まつている。（申略）本年の国立私立大学（短大を含む）の募集定員

約二十八万人に対して、進学希望者は浪人も含めると約四十三万人と推定される。差引き十五万人は浪人をする勘定となる。

戦後、大学進学希望者はふえる一方であり、三十三年度では高校卒七十七万七千人のうち進学希望者は十九万七千人、浪人七万五千人を加えて進学希望率は二五・四%であったものが、三十八年度には二九・九%、ことし三一・一%になるものとみられている(日本の教育水準、入試地獄)

ここに引用した二つの材料は、何れも異ったソースから計算され、不一致の点もあるが、ただ昭和三十三年高校卒の数だけは、文部省指定統計に合っている。されば、われらの加盟している日本私立大学連盟が、苦心して集計した「大学進学希望者推計」を信頼して参考としよう。しかも大学進学者には一人で二回も三回も受験しているのだから、大学側から見た数字か、高校側から見た数字かの疑問がおこる。これは高校側から見た、いわゆる、追跡調査だとのことである。次頁の別表を御一覽願いたい。大学への登龍門よりも、中校、高校への広い門に神経をとがらせねばならない。

学費値上げの限界

他山の石ながら教育費の最大公約数を紹介する。「まず国と地方公共団体の教育費についてみよう。一般に経済の発展した国ほど国民所得に対する公教育費の比率が高いが、わが国の場合、一人当たり国民所得は約四百六十ドル(三十七年度)とあまり高くないものの、国民所得に対する公教育費の比率は六%に近い、また国民総生産に占める教育費の割合は米四・五%、ソ連三・七%、EEC諸

国の三・二%に比べわが国は四一五%で、世界でも高いグループにはいつている。国、地方行政費総額との関係でみても二一・四%(三十五年度)と、世界で最も高い(日本の教育水準、教育費の増大日経参照)

もっと細かい父兄の負担額を学生一人当りに見た数字が出ているけれども、ここでは省略し、生々しい東京の有力大学に対する朝日新聞記事を抜書きして結論に急がねばならない。左の要約そのままを借用した。

「法政大学の助教授尾形憲さんが自校と他の有名私大を比較して述べたところを『法政』二月号から引用してみよう。

国公立と比べると、三十六年度ですでに、私大の入学金は平均二二倍、授業料四・五倍だそうである。法政では、三十八年度の予算は総計三二億円だが、収入面では、寄付金ゼロ、財産収入一六〇〇万円、国や都県の補助金五九〇〇万円、借入金九億、あとは学生の負担にまつ。ところで借入金の利息は、授業料収入の一割弱に達するそうである。

その授業料収入が人件費を辛うじて上回っているのは法政だけで、他の五大大学はみな足が出ており、それをカバーするのが入学金その他学生納付金だそうである。それでも無理をして校舎の新増築をしなければならぬ!」(「季節風」私学のお台所)

この孫引きを見つめながら、わがお台所と比較せんがため、まず、私大連盟三月号から私立大学の平均学費を抜粋してみよう。

「昭和三十九年度の私立大学のうち、文科系一二〇大学と工科系四四大学を調査したものをAとし、本連盟加入の文科系四五大学と理

昭和38年11月 (単位人)

大学進学希望者推計

(社団法人 日本私立大学連盟調製)

高校 卒業年度	小学校 卒業者数	A 中学校 卒業者数	B/A	B 高校 志願者数	C/A	C 高校 入学者数	D 高校 卒業者数	大学志願者数				大学入学 者総数
								E/D	E現役	浪人	計	
33年		(30)1,663,184	%		53%	886,359	776,753	20.8%	161,785			146,377
34		(31)1,871,682	54.1	1,013,523	52	976,270	854,377	20.7	177,260			155,686
35							933,738	21.1	197,847	98,996		166,761
36	(30)1,939,461	(33)1,895,967	57.0	1,080,828	55	1,049,403	956,342	21.3	203,852			179,622
37	(31)2,003,782	(34)1,974,872	58.8	1,163,146	57	1,118,220	1,016,181	22.2	225,643	115,485		201,125
38		(35)1,770,483	60.2	1,066,944	60	1,060,423	960,000	22.7	218,000	98,000	316,000	215,884
39	(33)1,419,060	(36)1,409,060	63.8	899,415	66	929,068	829,000	23.2	192,000	77,000	269,000	220,000
40	(34)1,967,230	(37)1,947,657	67.0	1,306,325	65	1,265,757	1,166,000	23.7	276,000	49,000	325,000	
41	(35)2,514,986	(38)2,505,000	68.5	1,716,000	67	1,678,000	1,578,000	24.2	382,000	89,000	471,000	
42	(36)2,442,687	(39)2,433,000	70.0	1,703,000		1,630,000	1,530,000		370,000	213,000	583,000	
43	(37)2,374,538	(40)2,365,000	71.5	1,691,000		1,585,000	1,485,000		395,000	309,000	668,000	
44	(38)2,140,000	(41)2,130,000	73.0	1,555,000		1,427,000	1,327,000		321,000	380,000	701,000	
45	(39)1,969,000	(42)1,959,000		1,430,000		1,313,000	1,213,000		294,000	409,000	703,000	
46	(40)1,774,000	(43)1,764,000		1,288,000		1,182,000	1,082,000		262,000	411,000	673,000	
47	(41)1,661,000	(44)1,650,000		1,205,000		1,106,000	1,006,000		243,000	385,000	628,000	
48	(42)1,588,000	(45)1,578,000		1,152,000		1,057,000	957,000		232,000	346,000	578,000	
49	(43)1,541,000	(46)1,531,000		1,118,000		1,026,000	926,000		224,000	303,000	527,000	
50	(44)1,477,000	(47)1,467,000		1,071,000		983,000	883,000		214,000	252,000	466,000	

- 〔注〕
1. 小卒数、中卒数の欄の左肩の()内数字は、小学校……中学校卒業時の年次を示す。
 2. 太線より上の部分は実数(学校基本調査)である。太線より下の部分は概数である。
 3. 高校志願者数 中学卒業者に対する志願者の比率が35年次60.2%36年次63.8%37年次67.0%であるところから38年次以降41年次迄は毎年次に1.5%増すものとみなし、それ以降は減少しても増す事はないものとみなして73%に固定した。
 4. 高校入学者数 中学卒業者に対する入学者の比率が36年次66%37年次65%であるところから38年次は1%増とみなし、それ以降は67%に固定した。
 5. 高校卒業者数 38年次以降は高校入学時の数から10万人が減少したものとみなした。(過去の実績より)
 6. 大学志願者数 現役 37年次は高校卒業者に対する志願者は22.2%であるから38年以降41年迄は毎年0.5%増とみなし、41年次においては24.2%であるところから41年次以降は変動のないものとみなした。
浪人 37年度文部省調査を基礎とした。浪人の算出方法は浪人の85%が翌年受験するものとして入学者総数の35%が浪人の合格者とみた。
 7. 大学入学者数総 39年以降は入学者数を22万人として推計した。

工科一五大学のB項を参照する。

理 工 科 系	初年度納入金平均	A	B
		二六、〇七円 一四、三六円	二三、六九円 一五、八七円

(昭和三九年二月四日調)

さらに東京と関西の七大学と比較し、同志社大学が将来に確保する数字をあげて見よう。

大 学 名	文 科 系	理 工 科 系
早 稲 田	三三、五〇〇	一七、五〇〇
慶 応 大	三三、〇〇〇	一八、〇〇〇
立 教 大	三〇、五〇〇	一五、〇〇〇
明 治 大	二二、〇〇〇	一五、〇〇〇
関 大	二一、〇〇〇	一九、〇〇〇
関 学	一〇、〇〇〇	一五、〇〇〇 (昭三九年度)
立 命 館	八、九〇〇	一四、〇〇〇 (昭三九年度)
同 志 社	六、一〇〇〇	一三、一〇〇〇
	昭和三九年度 文科系 工学系 一三、〇〇〇	昭和三九年度 理工科系 一三、〇〇〇

この数値は、昨年十月三十日付で同志社大学から公表した「学費改訂問題の理解のために」その「一」から「その三」に及び、また「資

料」などから拾ったがまことに詳細にわたる材料の片鱗に過ぎない。この値上げは、従来の赤字解消を第一義とし、さらに今後の物価上昇をも頭に入れながら昭和四十七年度までには、経常勘定と建設勘定併せてペイライン達成に漕ぎつける覚悟で編成されている。たんに大学に限定して述べざるを得ない紙数の制限ある点を許していただきたい。

昭和四十年度は、学費値上げが、こん度は東京方面の廻合せであつて、曩に計上した平均値を遥かに上廻るだろう。同志社大学が二重構造で今年と来年の二度の増額を決めた数字を前表に対比するとき、実に合理的な遠慮した、しかも苦心した妥当性が看取されるであろう。ただ、このうちは年間収支予算化の完遂に期待し、定着数の裏づけがなければ折角の苦心も実のらないのである。

急増の克服

向学心の伸び方は、前表に示すように増加の一途をたどっている。これを出産率と併せて考えるとき、米国では左のような一例を示している。

「一九七〇年(昭和四十五年)になると、合衆国における小学校の入学数は五〇%、中学校は七五%、そして各種大学では一〇〇%増加するものと予測されている。大学入学者のこの大増加の一部分のみが、出生率増加から来て、他の大部分は大学教育に対する米人の慣習の変化による。一九三〇年には十八才の人々の一二%、一九四〇年には一八%、一九五五年には三〇%が大学へ入学した」(大学経営

の理論と実務)

前記の資料は、一九五七年(昭和三十三年)のゼミナーであったから大要二十年間の比較に相当するが、米国でさえ、就学の漸増が近年大変な数値であるから、一九六四年(昭和三十九年)における私大連盟調の大学進学希望者推計E/Dは、高校からすぐ大学への志願者二三・二%と浪人七七・〇〇〇人を考慮に入れ、齡くとも二三・二%の定着と見て差支えないかと思う。換言すれば、米人の大学入学者に比し、日本人の入学者数が相当数低い率だといえる。私大連盟の調査により、大学志願者の増加が昭和四一年度までは毎年〇・五%増と見ているが、米国の増加する理由と同じ趨勢により、出生率のみの制約にかかわらず文化の伸展はもつと大きく激増するのではないか。

文部省調査局は、昭和三十七・八年度の高校卒業生に対し、来る六月一日現在まで、大学進学希望数、家庭の年間収入、貧困学生の学業成績などを調査する打開策を考えている。

また、自民党の文教調査会と文教部会の有力な両院議員が、文部省の提出した「入学志願者の推計」大学設置者別割合」急増対策に對する考え方」政府の財源措置」に基いて去る四月に二回審議している。

曩に私学振興議員懇話会が決議したような、私学経営が、三分の一は納付金、三分の一は寄付金、三分の一は国家助成などの理想案が果たして実現可能であるか、実状に則さない空想案では折角の調査も研究もしよせんは無駄骨に墮することを恐れる。

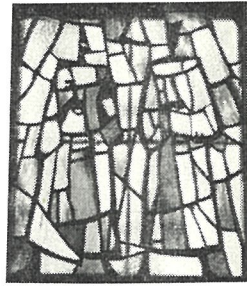
二年後の昭和四十一年度は浪人を含め約六十万人が大学の門に殺

到する予想となるから文部省は十万人の大学定員増加急増対策を講じている。恐らく設置別の割合から大学と短大は九〇%が私大に數寄せられる。前記米国の急増対策は、私大が負担額に堪えられない結果、いずれも回避し、大部分は公立すなわち州立大学の受入れとなり、施設対策よりか教授陣の払底に悩んでいる。

わが同志社は昭和三十年度末(創立八十周年)において在学生一九、一一五名であったものが、九年後の昭和三十八年三月十日現在で二三、九三四名となり、僅かに二〇%の増加に過ぎないが、建物は二五、八三五坪であったものが四五、八一五坪に増大し、一八〇%すなわち二倍程度に伸びて来た。昭和三十六年以来の苦しい予算を克服すること、大学進学急増対策に對しては、当然国家に對する公教育機関の義務として私学もまた大きな打開策の一半を負うべきである。

今四月から発足したばかりのわが長期財政調査委員会の方向と見透しが奈辺に到達するかは判らないが、これだけ施設の急増した新しい草袋を、同志社精神を遂行する質的向上の濃厚教育と共にどう有効適切に利用すべきかについては、全学園を挙げて衆智を集め、急速に決意しなければならない。(理事長)





新島襄と福沢諭吉

横 浜 礼 吉

同志社の新島先生と慶応義塾の福沢先生は明治の生んだ偉大なる
二大教育家である。明治の初年に多くの先覚的な教育家によって創
られた私学のうち、今日なお在続し、しかも立派な学園となつて創
の二大学は、真の意味の私学の代表と申してよからうと思う。

新島先生は元治元年（一八六四年）憂國の念やみ難く齡二十二の
時、国禁を犯して国外に脱出し、滯米十カ年にわたり、ニューヨーク
グラントで清教徒の信仰と教育を受け、明治七年十一月に帰国した
が、滯米中より念願である基督教主義の学園を創設せんものと、初
め神戸に、さらに大阪にその地を求めたが、種々な事情がこれを許
さず、ついに仏教の本拠といふべき京都に、しかも、その二年前に
ようやく切支丹禁制の高札が撤去せられた時に、すなわち明治八年
十一月に「官許同志社英学校」を創設したのである。明治五年学制
の太政官布告の前よりすでに京都は進歩的な教育制度を実施してい
る所として知られていた。福沢先生は明治五年五月に親しく京都の

教育制度を視察し、明治七年二月、今の京都府庁構内にその分校「京
都慶応義塾」を設置したが、これに専任する適当な担当者をつうるこ
とができず、学ぶ生徒も少くなつたので僅か一カ年で閉鎖廃校する
の止むなきにいたつた。

京都はこの進歩的な教育制度をさらによりよきものとせんとする
時、たまたま新帰朝の新島先生が京都府顧問の山本覚馬氏に学校設
置のことを相談し、同氏より非常なる援助を受くるようになったこ
とは、まことに天の撰理と申すべきことであつたと思う。時の田中
文部大輔は滯米中より先生を知り、なんとかして文部の官途につか
せんものとしたが、先生の固い意志を曲げることができなかった。
同志社英学校開校の数日後に同氏に書き送られて曰く「此の山水明媚
の地を下して幾多の有為の青年男女を教育し将来邦家のために尽す
所あらんとする幾百千の新島を養成するを得ば吾邦のために貢献す
る所なしとせず、是が予が畢生の大目的なり」と。先生は「吉田松
陰がキリスト教の洗礼を受けたような方」であつて、「先生が同志

社を創ったのは日本を愛したから創ったのである。日本を救はんがために創ったのである」と徳富蘇峰氏は申している。

二

福沢先生は安政五年（一八五八年）江戸の築地に蘭字塾を開き、慶応義塾を創り、教育により、さらに「西洋事情」学問のすすめ「文明論之概略」等の初期の著述により、西洋文明を紹介し、封建制およびその思想を打破し、近代国家建設に努力し、文明開化の新時代を来すことに大いに努めたのである。「維新の騒乱も程なく治まって天下大平に向いて来たが、新政府はマダマダ跡の片付が容易なことでなくして明治五、六年までは教育に手を着けることができないで専ら洋学を教えるは矢張り慶応義塾ばかりであった。上野の動乱の時にもウェーランドの経済書の講義を続け「慶応義塾は一日も休業したことはない此塾のあらん限り大日本は世界の文明国である」（福翁自伝）と。天下をのむ気概であった。当時の慶応義塾はわが国の学問の府であり文部省は三田にありとまで称せられたほどであった。しかるに明治政府もようやく政道が軌道に乗るようになり、教育制度も整備して、官立の学校を創るようになるに従って「何かの気まぐれに官民とか朝野とか忌に区別を立てて私を疎外し邪魔にして甚だしきは之を妨げなんとケチなことをされたのには少々困りました」と申されるようになってきた。官学優先の思想と国家を背景とするその組織力は、今日もなお存続して慶応義塾も同志社も私学として、創立当初より、この同じ難関に直面してきたのである。

新島・福沢先生はその国を思う切実なる願いにより、その一身を賭して新国家の建設に全てを捧げられたのであるが、しかし、この

両先生を思うとき全く異なる二つの浮彫を見るのである。「福沢先生はウェブスターの辞典を、新島先生は聖書を持ち帰られた」。新島先生は一冊の著述らしきものを著わすことなく、ただ純情な熱烈なる宗教的感化をもつて多くの有為なる年を教育した。福沢先生は慶応義塾の教育により、また、五十余に垂んとするその著述を通し、また経世的な才能をもって時事新報を経営して世を啓発し、指導したのである。徳富氏もいわれるごとく、新島先生はこの点「福沢先生の経世的智識には到底及ばなかった。」

福沢先生は、わが国が欧米文明諸国の水準に達するためには富国強兵とならねばならぬ。そのためにまず富（資本）を蓄積して経済力を強大にせねばならぬと考え、まず金銭を獲得することの必要なることを強調した。そうして門下生をあらゆる経済界に活躍せしめた。かかるが故に新日本資本主義形成の首謀者として一部の者から攻撃批難され、また「拜金宗の本山」とまで酷評せられた。内村鑑三氏さえも「彼に依りて拜金宗は恥かしからざる宗教となれり」とまで批難したのである。しかし、これは多角面なる先生の、ただその一つの面のみを見て批難せしことであった。先生の念願とするところは全て国家の独立による新日本の建設であった。「一身独立して一国独立す」独立の気力なきものは国を思うこと深切ならず「学問のすすめ」の独立は目的なり。国民の文明は此目的を達する術なり（「文明論之概略」と。この目的を達成するために必要なるものは全てこれを育てた。このために富も宗教も教育も全て必要としたのである。しかるに明治二十八年日清戦争の勝利により、わが国はようやく独立国家としての序につくことができ、念願の目的がよう

やく曙光を見るようになったことを無上に喜んだのである。

新島先生は年来の願ひである同志社大学の設立のために、病身に鞭打つて東奔西走せられたことがその死期を早め、明治二十三年一月二十三日、神奈川県大磯の客舎で昇天せられた。時に齡四十八。先生の死が報ぜられるや福沢先生は時事新報に弔文をかかげ、その死を惜まれた。「今の日本社会には学者宗教家の類を始めとし国家百年の計りのために真に社会の独立を謀るものとは晨星寥寥数ふに足らず。方今世間に国家独立の談少なからず。我輩の常に聞くところにして其言甚だ妙なりと雖も其事実を見る可らざるを如何せん。……今新島氏は今世の流俗に処して其流に流れず教育に宗教のことに熱心にして多年其節を渝へず真に独立の士と称す可し。其身死すとも其名は消す可らず」と。新島先生は、宗教家としてよりも教育家として同志社大学設立の遠大なる理想計画を早くより抱いておられたのであるが、明治八年三月、すなわち「同志社英学校」創設（十一月）の前に米国の恩人ハーデー氏に送った手紙の中に「予の確信によれば吾等が伝導師養成所以外に一つの普通大学程度の学校を起すに非ずんば吾等の事業の繁栄は望み難い。……若し吾々が唯神学とバイブルのみを教ふるだけならば私は恐れる、最優秀なる日本青年は吾れ等の下に留るを肯じないであろう。彼等の要求なす所のもは此外実に近世學術の新知識であるからである」と。明治二十一年十一月十日「同志社大学設立の旨意」を発表し、全国の人に訴へたのである。「吾人は政府の手において設立したる大学の実に有益なるを疑はず、しかれども人民の手に抱つて設立する大学の実に大なる感化を国民に及ぼすことを信ず、……其生徒の独自

一己の氣象を發揮し、自治自立の人民を養成するに至つては、是れ私立大学特性の長所たるを信ぜずんば非ず、……基督教主義は、実に我が青年の精神と品行とを陶冶する活力あることを信じ、……此の主義を以て品行を陶冶する人物を養成せんと欲するのみ、……一國の良心とも謂ふ可き人々を養成せんと欲す、……百年の謀ことは人を植ゆるに在りと、蓋し我が大学設立の如きは、実に一國百年の大計よりして止む可らざる事業なり……」と。かくして先生の死後二十二年の歳月をへた明治四十五年五月、先生の待望せられた同志社大学は設立せられたのである。

三

新島先生と福沢先生は宗教に関しては全く対照的であつた。新島先生の教育方針の根本理念はもとより基督教にあるが、福沢先生は幼時から「宗教には全く淡泊」であり、明治の初年頃は、むしろ、基督教には批判的であつた。明治十四年六月十四日、京都で本願寺の要望により、四名の慶応義塾出身者による基督教攻撃の演説会が催された。これに対して同志社は六月十八日、新島先生およびその門下の人々によつて、反駁の大会を開いたことがあつた。福沢先生は、ちょうどその頃、同年九月に「時事小言」のうち「外教の蔓延を防ぐことについて」の中で「唯其布教に由て人民政治上の考に如何なる影響を及ぼすもの歟を明にせんと慾するのみ。……自分は仏教の友にも非ず。耶蘇教の友にも非ず。されば亦其敵にも非ざる故に双方共に安堵せられんことを願ふ」と述べられているように、この京都の演説会的一件は、ただ血氣盛んなるその門下生が先生の真意を解することなく行動なしたるものであつた。明治十七年になる

と「宗教もまた西洋風に従はざる可らず」と、「宗教の功德も経世上また必要なり」と、経世上の立場から宗教の必要なることを是認せられるようになってきたのである。

しかるに晩年に至っては「自分も残る生涯の仕事の一つとして仏教でも耶穌教にてもいづれにても宜しい。これを引き立てて多数の民心を和らげるようにする事」が彼の生涯の最後になさんとする念願の一つであった。このように宗教に対する考え方が非常に変わったのであるが遂に信仰に入ることはなかった。晩年明治三十年の著述なる「福翁百話」のうちに、彼は初めて宗教観に近きことを述べているが、その後述を聞くことなくして他界せられたことは、誠に遺憾なことであった。しかし、彼は男女道徳・社会道徳の向上を計ることを早くより畢生の念願として「日本婦人論」「品行論」「男女交際論」「日本男子論」「女大学評論」「新女大学」等の著述を通じて広く世に呼びかけ、これを善導せんとしたのである。先生逝去の一カ年前、すなわち明治三十三年に、信頼せる門下生に執筆せしめた「修身要領」を国民道徳の基本なりとし、門下生をして日本全国に遊説せしめ、一般同胞の道徳の向上を計らんとした。明治二十九年十一月、先生は慶応義塾の教育方針の理念を「遺言の如く」に発表して曰く「慶応義塾は単に一処の学塾として甘んずるを得ず。其目的は我日本国中における気品の泉源智徳の模範たらんことを期し之を実際にして民家・処世立国の本旨を明にして之を口に言ふのみ非ず躬行実践を以て全社会の先導者たらんことを期するのみ」と。先生は明治三十一年の大妻後、一時回復せられたように見えたが、明治三十四年二月三日、遂に六十七歳の生涯を終られた。基督教界の

元老植村正久氏は先生の死を悼み、弔して曰く「日本の大平民として尊敬する福沢先生遂に逝きぬ。……明治の世界にも平民として自立せり。其の独立自尊主義は慶応義塾の修身要領発布と共に始まりしものに非ず。先生は独立自尊を以て出身せしものなり。其の生涯は此の主義を貫徹せんことを期し少くとも正直に其の実践躬行を圖りたるものなり。……儒教主義を忌み嫌いて根底より日本道徳を改革せんと志し夙に文明流の倫理を講じ晩年に至り慨然として修身要領の伝道者たりし福沢先生は実に戦いの人にてありき。福沢先生は宗教家に非ず。しかれども宗教以外の意味において彼は多くの偶像を破壊せり。先生の手には種々の偶像粉砕せられて日本文明の進歩は著しく其の速力を加へたり……」と。

明治の生んだこの二大教育家はその教育の理念・主義において各相違せる独自の道を歩んだのであるが、共に独立独立歩単なる一市民たることを誇りとし、常に私学の自由なる精神を高揚し、官学・官僚に對抗してその節を屈することなく、遂にその創立者も夢想だにしない立派な教育王国を打建てるにいたつたのである。私学はその創立者の建学の理想精神を忘れることなく、よくこれを受継ぎ、新しい時代に応じてこれを育て行くことにその使命があり、生命がある。創立者の建学の精神を失いたる時は、私学としての生命を失いたるに等しい。同志社と慶応義塾は、さらに、今日より一世紀後の日を迎える時、歴史は正直にその歩みし功績を語るであろう。それはこれから後に来り両先生の遺風を継ぐ者の双肩にあるのである。

田 中 良 一

今年の七月十七日が新島先生の函館脱走から百年に当るので、当時の歴史的背景とその時代の子新島先生とをざっと回顧してみたい。

鎖国と洋学

徳川幕府は寛永十(一六三三)年に鎖国令を出し、日本人の海外渡航禁止と共に切支丹訴人を奨励した。しかし、先進文化の波はこの鎖国の岸に、西から東から遠慮なく吹き寄せて内部に浸透し、鎖国態勢を内から漸次崩壊させた。鎖国といっても特定国の商船は長崎で自由に交易し、宗教に無関係の図書は監督下に輸入されて、特定の学者がこれに接した。ことに、將軍吉宗は禁書を解いて歐洲文明の導入を策し、幕府の高官新井白石は「西洋紀聞」「采覧異言」を著わし、さらに民間蘭学者の説が享保改革の殖産興業方針中に採択される等、日本人の海外渡航こそ禁止されているが、洋学が幕府の中心に受容され、ここに鎖国態勢は内から崩れかかった。

こんなことが後代に影響して前野良沢、杉田玄白、大槻玄沢などの蘭学興隆時代をへ、平賀源内、司馬江漢、山片蟠桃などは封建的身分制を批判するに到り、また一方、シーボルトの門から出た高良斎、高野長英なども内外情勢の危機を憂慮して

これを行動の上にもあらわすに到った。このほか佐藤信淵、本多利明、林子平らの経済思想や国際観も鎖国批判の上に立ったものであるから、それが前述の蘭学者達の言説、行動などと共に、時代の先端に立った青年知識層に与えた影響は大きかったと思われる。

鎖国の崩壊

蘭学の興隆により国際意識が高まった結果は幕府、雄藩共に武器の輸入、洋式訓練の採用、実学の勃興と洋式の殖産興業となり、あるいは押し付けられたとはいえ、米、英、露以下の諸国との修好条約締結ともなり、続いて幕府は文久元(一八六一)年六月、西周、津田真道、榎本武揚、赤松則良、林研海、伊東玄白らにオランダ留学を命じ彼らは九月に長崎を出発した。のみならず慶応二(一八六六)年には一般の留学を許可した。実に寛永の鎖国から二百三十三年目で鎖国は、実質からも形式上からも、幕府自体により完全に崩壊した。

潜行と歴史の審判

こんな情勢の中で、当時、日本有数の慧眼の国士型秀才で、しかも日本の政治・文化の中心、江



戸にいた青年「新島七五三太敬幹」が黙って、じつとしてる筈がない。まして藩主は進歩的な学者であり、洋式訓練を採用し、藩の選抜生に蘭学

せしめ、自らの蔵書中には漂流記や米利堅新誌のような写本も持ち、しかも、後者を新島七五三太に与えているほどの人であった。

また蘭学の教師は、時に「フレイヘイト!!」

と絶叫して自由にあこがれ、その塾で見る図書は西欧文明の高さを教え、ひそかに読む禁書、宗教書は前代未聞の倫理的新宗教の存在を暗示している。この社会、この身辺。真の憂国多感の青年がどうして心中に海外潜行の念を燃やさずにおれようか。ましてや幕府が自ら禁を破って留学生

を送るに到っては、小藩安中の俊才は遂に辛棒できなかつたであらう。

あとで知れたことであるが、当時海外へ潜行したのは新島先生だけではない。長州からは、新島先生の潜行に先立つ一年の文久三年、井上馨、伊藤博文、井上勝が変名して英国へ行き、薩摩からは新島先生に一年おかれて十五名も英国へ行っている。このうち六名は後に米国へ行き、或る者は新島先生にも会った。先生の署名簿に Your friend Yoshida Hicomaro Monson, Nov. 27th 1867. 種子島綱輔と二人が署名している。

このように幕末の海外潜行は、当時の日本のトップクラスの青年と為政者が、時勢のきびしい要求により、緊要のこととして実行したことで、百年後の今日になって言えることであるが、幕府の禁制を破るとか守るとかかの問題を超越した大きな歴史の本流に棹さしたものであった。また幕府や長州や薩摩の留学生は幕府や藩の方針により、幕府のため藩のために留学したが、新島先生の場合は先生自らが幕府や藩を超越し、日本国のため十字架を負って脱国したところに画期的な意義があり、この意義は同志社存立の基礎でもある。

(史料編集所長)

*挿画はペリー提督の日本遠征記掲載の幕末の函館港

大学経営の秘訣

今 中 次 磨



先日、広島へ新総長住谷君があいさつに来られたとき、その校友会の席上でも述べたことであつたが、現在の同志社は従来と違って学生なしでは経営できない状況になっているのだから、住谷君のような、学生をよく理解し、また学生から支持されるような総長を迎えたということは、まことに適當であつたと思う。とくに住谷君は旧組合教会の名門であつて、同氏の伯父さんであつたと思うが、住谷天来といへば、組合教会の柱石の一人であつたから、キリスト教主義からいっても、また同志社を支えている組合教会の立場からいっても、住谷君は同志社と因縁浅からぬ名門の出身であるといつてよいわけだ。こういう二つの意味で、新総長は新同志社を負う人物として、まことに適任といふべきである。

私は同志社が従来と違つたといつたが、これは同志社に限らず、

現在の私学はすべて従前と違って、授業料中心の経営になつてゐることを指すのである。従前は私学の経営に多大なファンドが必要であつて、歴代の私学主腦者は、そのできない人物は、私学指導の能力がなかつたのであるが、そのファンド経営は今日では夢と消え、今日では私学の経営は直接に、学生の納める授業料や入学金その他の納入金で経営されることとなつた。したがつて自然、私学は学生の数を増加し、マンモス化せざるを得なくなつてゐる。

私は大正七年七月東大をおえ、直ちに同志社から研究費二十五円を毎月もらい、そうして翌八年四月から同志社に講師として授業を担当し、九月に新大学令によつて同志社大学が発足すると同時に教授となり、大正十四年十月法学部長の任期終了まで同志社に在職したのであるが、当時、私は学生を三〇〇人に増やすことを主張した

が容れられなかった。三〇〇人増員すると、経営費の赤字年三万円が何とか収め合せがつく計算だったからである。ところが、理事会はキリスト教主義をかざして少教教育を主張していたので、私の主張は容れるところとならなかった。そして当時の総長海老名弾正先生を募金に追いやり、米国にまで先生を募金に派遣した。先生は総長就任の際の条件として、募金の責任は負えないということだったので、代りに足利武千代氏を足利銀行頭取の職から引抜いて、財務主任にしたのであった。随分皆さん募金には苦勞をされたのである。岩倉の土地問題も端をその辺から発している。第一回の任期が来たとき私は海老名先生に再任されぬように進言した。それは理事会の方針に一致できないものがあつたからである。私はいくらその前の総長原田助氏との話で同志社に就任したので、海老名先生と吉野先生とが推選者だった。当時まだ法学部長としては櫛田民蔵氏が在任され、日本経済史の滝本博士はすでに平教授になっておられた。海老名先生は、私より後に同志社に来て総長になられたのであつたが、これは全く予想しなかつたことだったのである。というのは海老名先生はかつて同志社を批判され、朝鮮あたりへ移した方がよいといわれたことがあつて、校友の反感を買つたことがあつたので、先生の総長就任には、校友の一部に反対があつたからである。しかし先生も青年教育には深い使命觀を抱かれていたので、意を決して、反対のある同志社総長に就任されたのだが、なかなか先生の意図は行なわれない状態であつた。その最大の原因は財政難であつて年々約三万円の赤字がつづいた。この赤字を解決するために、自然財界の支持を仰ぐ必要があつて、校友中のその方面の能力者に接

近したといふところに同志社の暗礁があつたわけである。

今日と異り、当時の財界人はいまだ十分に大学教育の精神を体得しない人が多かつた。だから大学令の定めているような「学問のうんのうを極める」といふようなことには、全く理解を欠いていた。だからそれらの人々の希望を入れねば金は集まらないし、金を集めようとすれば大学教育の理想は加減しなければならぬという矛盾に苦しめられた。その頃はまた今日のような学生運動はなかつた。学生の乱暴といへば、学年試験に落第しそうな学生が、教授を脅迫して廻る——例えば短刀を呑んで教授宅を廻るといふようなことがあつたような状況である。あるとき試験の監督教授から教授会にカンニングの通告があつて処分が問題になつたが、学生はカンニングを否認して、そのカンニングを見付けた人を脅迫し、教授会もどっちが真実かわからなくなつて困つたことがあつたといふような事情だつた。だから今日のように、学生運動をやかましくない理事もなかつたのであつて、問題はあまり「うんのうを極める」教育ばかりやるので役に立たないといふ苦情が理事から出るといふことだったので。全く隔世の感である。あるときその理事たちの一人が、われわれ教授と教育についての懇談会を開いている席上で、君らの教育は「羊頭をかかして狗肉を売るものだ」といふ失言をしたことがある。この理事の失言に対して私は断然相容れ難いといふ決心をしたので、早速辞表を出し、ちやうど任期の来ている海老名先生にも一緒に退陣を希望したのである。しかし、先生は総長としての責任を感じて留まられた。先生は私の辞職も容易に認めて下さらないので私は帝大の方へ転任できるからといふ内情を話してようやく先生は

私の前途のために同志社から解放して下さったわけである。その際、私は別に帝大のどこからも招かれていたわけではないが、その前、私は京城大学へ行かないかという勧誘を小野塚先生からうけて、同志社のために離れられないからといって断った事実があるので、海老名先生から解放してもらうために、そういう術策を用いて相済まなかったわけであるが、やむを得なかったのである。そういう関係であつてもなく同志社をやめた私であつたが、小野塚先生は東大農学部講師にたのみこんで下さつて一応浪人は免れたが、月給二十五円であつた。それから四年たつて九大法文学部の喧嘩而成敗事件があつて、ようやく九大教授に救われたのである。

そういう同志社の前史を知る私から見ると、今日の同志社は全く變つてしまつた。大量生産とキリスト教主義とは必ずしも矛盾する項目であつてはならないということがわかる。基金のない大学教育の不健全をいつてみても敗戦インフレの中の日本教育界はどうしようもないのである。財政は学校といえどもソロバンに合う必要がある。良い教育を求めるなら給与をよくして、研究施設を充実せねばならない。今日の私大は国大に較べるとその施設の外形は極めて立派になつてゐる。これは借金ができるからである。しかし、施設は借金でまかなえるが、経常費の充分は借金によるわけにはゆかない。しかし、借金の負担が経常費に食込むようになっては、その財政は失敗といわねばならない。

恐らく今後、国立大学は施設においても漸次立派になつてゆくと思ふ。その兆候はすでに三十九年度から施行されている特別会計で見え始めている、経常費の方も年々のベアで国大はまた私大よりは

良いようだ。ただ国大のネットワークは定員法による人的制約と公務員法に制約される研究費の低さである。この点は私大は自由であつて、大学を大学そのものらしく経営することができる可能性が多分にある。法人も昔のように大学教育に無理解ではあるまい。教授がこれを指導する勢力さえもつようになった。要は施設設備のような一時的経費と、毎年引きつづいて必要な経常費との配分をどのように組込むかということが、今日の私大経営のコツだらうと思ふ。経済学者たる住谷新総長に対して期待される点もまたこの辺の事情だらうかと思ふ。

歴史の永い、伝統豊かな同志社を負うて苦心も多いと思ふが、活躍を望んでやまない。最後に一言呈したいことは、総長の求める支持者は理事会ではなくして、同志社学生であるということ——どうか学生と一体になつてやつて下さい。そこに秘訣があると私は住谷新総長に伝えたい。

(校友・前佐賀大学長)

▽

▽

▽

▽